探究的な学びとは
～みさと学で探究学習を進めよう！～

昨年度から、『みさと学』〔拙稿№17 参照〕において“探究学習”に力を入れています。単なる調査研究的な学習活動から、探究的な活動へとより学習を深めようとしています。高等学校では、すでに『総合的な探究の時間』が、2022（令和 4）年度から必修科目として導入されています。

ところで、原点に立ち戻って考えると、いったい“探究”とはどのような意味を持つ言葉なのでしょうか。“探”という字は、「手へん（手の意）」と「罙（シン・深くさぐる意）」からなる形声文字で、「手を使って奥深くまで探し求めること」を意味します。“捜”が「失くしたものをさがす（捜索）」のに対し、“探”は「未知の場所や奥深い場所をさぐる（探検）」といったニュアンスで使われることが多いです。

また“究”は、「ほら穴を表す“穴”」と、「体を曲げた形を表す“九”」が合わさり、大きな身体を折り曲げて穴の奥へ入り込む様子から、「真理や本質を極限まで深くさぐる、追究する、究（きわ）める」という意味を持っています。

さて、中学校の学習指導要領における“探究学習”は、総合的な学習の時間を中心に、実社会の課題解決に向けた『問い→調査→分析→表現』のプロセスを主体的・協働的に行う学習です。知識の暗記ではなく、実生活で活用できる能力（生きる力）の育成を目指し、教科横断的なテーマで実施されます。

自ら問いを見いだし、課題解決のための資質・能力を育むこと、また、自己の生き方を考えることが“探究学習”の目的といえるでしょう。

この目的は『みさと学』の学習内容と合致します。『みさと学』は「ふるさとを知り、自らを見つめ、自らの生き方を考える」学習だからです。

“探究学習”のメリットとして、次の 2 点が挙げられます。

① 学びの自由度が高い。

“探究学習”の最大のメリットは、生徒自身が探究するテーマを決め、自分がやりたいことや、興味・関心を持っていることについて、じっくり学ぶことを目標としています。そのため、学びの質が高まり、学びそのものへの前向きな姿勢を持ち続けることができます。

② なぜ勉強しないといけないのかがわかる。

もう一つのメリットは、身に付けた知識を実際に使って問題を解決することで、勉強したことと実社会との結びつきを実感しやすくなります。そのため勉強することの意味が自覚されるようになります。

以上のことをまとめてみますと、“探究学習”とは、自分にとって未知の分野に興味を持ち、課題設定をして、その解決に向けて取り組み、その結果を発表する学習です。その過程で、友達と協働しながら課題解決に向かっていくことで、生きる力をはぐくむ学習といえます。

そのためには、教師自らが、“探究学習”という言葉の意味をもう一度とらえなおし、その目的にかなうような適切な支援、励ましが必要です。その中では、教師自身も想定しなかったような学びが展開されるかもしれません。それは喜ばしいことであり、それをまた受け止めて伸ばしていくのが、私たちの役割ではないでしょうか。

このことに関連して、私はある講演会で、次のようなお話を聞いたことがあります。

中学生の総合的な学習の時間の成果発表会で、あ

るグループが『この土地の方言』というテーマで、「あなたは、この土地の方言が好きですか」というアンケートを、地域の人たちにとり、分析したものを発表しました。それによると、「あまり好きではない」という人が圧倒的に多かったという結果でした。その理由は「方言を使うのは少し恥ずかしい」というようなことだったと思います。発表が終わった後、担当の先生がその発表の優れたところを褒めた後、「ところで、このグラフには『方言が好きだ』と回答した人が数人いるよね。この人たちはどういうところが好きだと言っているのかな」と問うたのです。その教師は、「これこそがこの学習のポイントだ」と思ったそうです。ところが、発表した生徒たちは即座に答えられませんでした。そこで、もう少し調査活動を継続することになりました。

新たな課題を与えられた生徒たちは、さっそく町に繰り出して、「この街が好きだ」と回答してくれた方々を訪ねました。すると、この回答をしてくれた方はすべて女性で、結婚して他の地域から移り住んだ人たちだということがわかりました。そしてこの町が好きな理由はみな口をそろえて、「この町に早くなじむために、できるだけ方言を使って町の人と接するようにしたところ、町の人たちがとても親切に受け入れ、助けてくれるようになったのです」と教えてくれたのです。「だから私たちはこの町の方言が大好きで、この町も大好きなんですよ」と話してくれました。

このことから、生徒たちは、この土地の方言が嫌いな人たちのとらえ方と、少数ではあるけれど方言が好きな人たちのとらえ方が全く違っていることに気づいたのです。

生徒たちにとってこのことは大きな発見であり、ともすれば自分たちもこの町の方言を嫌いになっていたかもしれないところを、方言のよさを感じている人たちに出会い、そのことからこの町の魅力を再発見する大きな出来事となったのです。

この結果を次の総合的な学習の時間で発表したところ、助言した先生は満面の笑みだったそうです。

この実践から学ぶべきことがあります。それは、通り一遍の調査研究から、一歩深めた“探究学習”に進むことで、より大きな学びが得られるということです。そして、この教師はそれがわかっていて、大切なポイントを見落とさずに、生徒たちにもう一度学習を深めるきっかけを与えたということです。

単に「課題は自分たちで見つけましょう」「探究的な学びをしましょう」と言うだけでは、学びはなかなか深まりません。そこには、やはり指導者として教師のアドバイスや助言が必要なのです。一言でもいいのです。何が重要なのか、児童生徒の様子をつぶさに見とりながら、教師自身が考え、見つけ、そして支援する。それを行うことで、“探究学習”がより深まり、児童生徒の成長につながっていくのではないでしょうか。

先生方の活躍を大いに期待しています。

（市川三郷町　教育長　渡　井　　渡）